

安成通信 2019.1.4. 「サピエンス全史」考



明けましておめでとうございます。本年もどうかよろしくお願い致します。

さて、年末年始の休みには、かねてから気になっていたユヴァル・ノア・ハラリ著の「サピエンス全史（上下2巻）」（以下、「全史」と略）とその続編「ホモ・デウス（上下2巻）」を読みました。私たち人類（ホモ・サピエンス）はどのようにして地球を席卷し、現在の人類社会を創ってきたかを、世界史学者として、ユニークな視点で記述したものです。続編は、さらにこれからの人類社会はどうなるかに焦点を合わせて論を展開したものです。「全史」は世界で800万部を突破したそうです。

「全史」は予想に違わず、大変刺激的で、「目から鱗」的な論が展開されています。人類はまず、7万年前の狩猟採集民時代に、お互いに知らない者同士でも意志の確認と連絡を取り合うことができるという認知革命を引き起こし、1万2千年前に農業革命を引き起こしたが、定住して農産物を作る過程で支配者・被支配者の関係が強化され、人類（の大部分）はかえって不幸になった。この過程で「帝国」となる国々が次第に肥大化し、特に中世以降、一神教の「超人間的秩序」の力も借りかたちで侵略と戦争の時代になり、いわゆる大航海時代を通して、「帝国」による支配はグローバル化した。そして17世紀以降の科学革命は、「帝国」と資本主義と組むかたちで、西欧を中心として世界を「近代化」へと導き、世界全体として、戦争から平和が卓越する時代となった。ただし、無知を知に変えるプロセス自体を価値とする科学の精神と、生産と利益（利潤）がサイクルとなった資本主義の原理が結びついて、人類の「無限の進歩」という考えが生まれることになったが、この「近代化」は、巨大資本の益々の肥大化と大部分の「幸福でない」人類を生み出している。そして現在、科学、特に生命科学の「進歩」は、「病気を克服する」「長寿を達成する」という、誰もが反対できないようなキャッチフレーズの下で、脳も含めた人間そのものの生物学的改造（サイボーグ化）に向かっており、近い将来、人類そのものの性格まで変えてしまうかもしれない。

かなり誤解曲解もあるかもしれませんが、以上が全体で600ページ近い「全史」の、大変おおざっぱな私なりの理解です。神の問題、文化の問題、貨幣の問題など、「虚構」に乗った想像と行動ができる人類と、一方で、無知の問題のあることを集団で公に認めることを前提とする近代科学を生み出した人類の相克が、現在の人類社会を創っている（創ってきた）というのが、歴史学者としてのハラリ史観のような気がします。

「人と自然」あるいは「人類と地球」のあるべき関係を考えている徒としてやや物足らなかったのは、現在の地球環境問題や持続可能な社会を頭わに取り上げた議論がほとんどなかったことです。ただ、それはまさに現在の人類が抱える最大の問題であることも、「全史」のあとがきで以下のように締めくくって警告しています。「（今や全地球の主となった）私たち（人類）は自分自身の快適さや楽しみ以外は追い求めず、仲間の動物たちや周囲の生態系を悲惨な目に遭わせているが、それでも決して満足できずにいる。自分が何を望んでいるかもわからない、不満で無責任な神々ほど危険なものがあるだろうか？」そして、人類としての真の幸福の追求には、「足るを知る」あるいは「自分を知る」という仏教や道教の主観的な感情が大切ではないか、ということも最終章で示唆しています。

たくさんの興味深い、そして意表をつくような論点が盛り込まれており、人類の歴史とこれからの人類の在り方に興味をもつ多くの方々には、大いに刺激を受ける書としてお勧めします。続編の「ホモ・デウス」については、別の機会にコメントしたいと思います。

文献：

ユヴァル・ノア・ハラリ著 サピエンス全史—文明の構造と人類の幸福（上下2巻） 河出書房新社 2016年（原著は2011年）

同著 ホモ・デウス—テクノロジーとサピエンスの未来（上下2巻）2018年（原著は2015年）